

Ⅱ 信頼関係の構築のために

～考えてみましょう～

- ・先生が児童生徒と信頼関係を築くために心がけていることは、どんなことですか？
- ・なぜ先生との信頼関係が大切だと考えますか？

Ⅱ－１ 児童生徒理解と信頼関係

学習や生活の指導・支援の基盤の一つが児童生徒理解です。児童生徒のよき、困りごと、感じ方等を多面的に理解します。

児童生徒理解をもとにした適切な指導・支援が信頼関係の構築や、更なる児童生徒理解の深化を生み出します。

子どもと積極的にかかわり、一人一人の子どもや学級集団の実態・状況を多面的に把握し、とりわけよさを理解することが基本です。

(1) 多面的な理解

子どもたちは、それぞれ個性を持っています。子どもたち一人一人のよきや個性を理解することで、教師はその子に合った支援方法や指導内容を選択することができ、子どもたちは自分の可能性を最大限に発揮することができます。また、問題行動が起きた時、その背景を多面的に理解することで、その原因を特定し、適切な対応策を講じることができます。子どもたちは、教師の適切な支援によって成長することができます。

担任を中心とした教師の観察に加え、その子どもに係る情報(*)も考慮して、その子の背景を把握しましょう。また、学年部、教科担当、部活(クラブ)顧問、養護教諭、用務員、スクールカウンセラー等、子どもと多様な立場で関わる教職員からの情報も有益です。大切なのは、全ての教職員が、「子どもに関心をもって肯定的に関わる姿勢」、そして、「気になる様子が見られたら、日常的に情報を共有できる仕組み」です。学校全体でそのような風土や仕組みをつくっていきましょう。

この他に、いじめアンケートや生活実態調査等のデータに基づく客観的な理解も有効です。教育相談では、子どもの話を、受容・傾聴しながら共感的に寄り添う姿勢を大切にしましょう。

- *「家庭環境、成育歴、学力、得意・不得意なこと、興味をもっていること、学校内外の人間関係」等、その子ども自身のことやその子どもを取り巻く環境を指します。

(2) 子どもとの関わりの中での理解

授業の中でも次のことを大切にしましょう。児童生徒に寄り添いながら、教師が理解しようとする姿勢は信頼関係構築の基盤です。

- 子どもをよく見る
 - 子どもの話をよく聴く
 - 子どもに寄り添う
 - 子どもとかかわる
- } よさ、困りごと、感じ方を理解

コラム

【多様な児童生徒の理解① ～授業で‘ほんとは困っている’子どもの姿～】

例えば、こんな様子が見られる児童生徒はいませんか？

- ・集中できない
- ・落ち着きがない
- ・友達とトラブルばかり起こす
- ・課題に全く手がつかない
- ・いつもぼんやりしている

児童生徒によっては、困っていることをうまく伝えられないこともあります。

- ・周りの空気を読みすぎてしまうから
- ・恥ずかしがり屋で人に相談できないから
- ・自分の気持ちを言葉にできないから 等

一見、問題行動や怠学と思われる行動は、実はSOSのサインと考えられます。多面的な理解のもとに、子どもたちが安心して授業に参加できるよう支援していきましょう。必要に応じて、専門家に相談することも大切です。

【多様な児童生徒の理解② ～人一倍敏感な子ども(HSC)～】

HSC(Highly Sensitive Child)は「人一倍敏感な子ども」のことを言います。

約5人に1人がHSCと言われていることから、学校では、どの学級にもそのような児童生徒が存在すると考えられます。HSCの子どもは思慮深く、他人の気持ちに敏感で、些細な変化にも気がつき、慎重に行動したいと思う、という特徴があります。学校生活には、そのような児童生徒にとって刺激が強く、苦手とする場面が日常的に存在します。例えば、音楽の時間に出る音や給食の時間のごはんの匂いなどです。また、休み時間等のにぎやかな時間や、学校行事等で集団行動を行う場面では、とてもエネルギーを消耗するようです。子どもの行動の背景には、このような過敏な気質があるのかもしれません。

【多様な児童生徒の理解③ ～子どもの気になる行動の背景～】

ADHDやASD等と思われる行動と、愛着形成に課題がある場合の行動には、似ているものがあります。例えば、落ち着きがない、集中力がない、衝動的な行動が多い、対人関係が苦手、感情のコントロールが難しい、などです。多面的な理解のもとに、困った行動の原因を把握することが適切な支援につながります。必要に応じて専門家にも相談しながら、チームで進めていきましょう。

◆「多様な児童生徒の理解」については、次の資料も参考にしてください。

「新潟市特別支援教育サポートブック」(新潟市教育委員会特別支援教育課 令和6年度版)

第2章 学級づくり・授業づくり編 6 子ども困っていることへの対応(54ページ～)

➤ 振り返ってみましょう

- ・児童生徒の「多面的な理解」のために、今行っていることはどんなことですか？
- ・その手立ての中で、よりよく理解していくはどうしたらよいと思いますか？

Ⅱ－２ 子どもと関わる際に大切にしたいこと

身なりや服装、名前の呼び方に気を配ることは、子どもたちの安心感と信頼感の醸成に加え、教育者としての模範、保護者からの信頼という点でもとても大切です。

（１）身なり

私たち教師は教育公務員として勤務しています。それゆえ、教師には高い倫理観が求められ、服装や身なりもその一部です。清潔感があり、TPOに応じた服装は、子どもたちに安心感を与えます。また、教師は子どもたちにとって、社会に出る上で模範となる存在です。きちんとした身なりで子どもと接することは、子どもたちが社会性を学ぶ上で重要な役割を果たします。

また、保護者の方々も、教師の身なりや服装を見ています。TPOに応じた服装は、一人の社会人として保護者から信頼を得る上でも重要です。

（２）言葉遣い（話し方）

子どもたちは、周りの大人の言葉遣いを模倣しながら言葉を覚えるとともに、言語感覚も育ちます。特に、教師や保護者など、身近な大人の言葉遣いは、子どもたちの思考や価値観の形成にも影響を与えることは想像に難くありません。

教師から、温かみのある言葉遣いで労いや称賛をもらった子どもは、自尊心や自己肯定感が高まり、更によりよくなりたいと意欲が湧くでしょう。逆に、配慮のない否定的な言葉や侮辱的な言葉を耳にした子どもは、たとえそれが他の子どもに向けられたものであっても、心は傷つき、学校や教室は安全で安心な場ではなくなります。

子どもを一人の人間として尊重し、丁寧語で話すことを基本としましょう。乱暴な話し方や感情的な言葉遣いは、子どもを委縮させたり、時としていじめを助長することにつながったりすることがあります。どんな子ども、間違いや失敗、苦手なこと、分からないことが安心して言える雰囲気になるよう、言葉遣いにも意識を向けましょう。

（３）呼び方

子どもたちのことをどう呼ぶかは、子どもたちとの距離感や関係性を築く上で重要な要素となります。適切な呼び方は、子どもたちの自尊心を尊重し、信頼関係を築く上で重要な要素です。

授業で子どもの名前を呼ぶときは「～さん」を付けて呼ぶようにしましよ

う。子どもに、「あなたのことを大切に思っている」ことが伝わります。個人を大切な一人として尊重する第一歩です。

コラム

子どもを呼ぶときに「お前」と呼んだり、呼び捨てやあだ名で呼んだりすることが、子どもとの親密さにつながると思うことや、そのように呼ぶことで、子どもとの上下関係をはっきりさせたいと思うことは、教師の一方的な思い込みです。呼ばれる子どもだけでなく、その様子を見ている他の子どもたちにも影響を与えます。子どもに対する、日々の教師の発言や呼び方が、子どもの人権感覚を育てていることを意識しましょう。

(4) 表情

「目は口ほどにものを言う」という言葉があるように、子どもは、教師の「表情」「アイコンタクト」「身振り手振り」等から教師の気持ちを読み取ります。非言語によるメッセージは、言語によるものより多くのメッセージを伝えるとされています。

子どもは先生方の立ち振舞いをよく見ています。笑顔でさわやか、そして温かく接する先生の姿がロールモデルとなり、子どもたち同士の良好なかかわり合いも増していきます。

(5) 時間を守る

時間を守ることは、子どもたちが時間管理の概念を身につける上で大切な要素です。また、時間を守ることは、社会生活においても信頼関係を築く上で基本となります。教師が時間割やスケジュールを守る姿を通して、子どもたちは時間を意識し、計画的に行動することを学びます。

また、授業の開始や終了時刻を守り、子どもが移動時間や休憩時間を確実に確保できる環境は、安心して安全な学校生活につながります。授業進度の関係で、授業を延長しても、肝心の子どもたちの集中力は続かないものです。中には、時間通りに進まないと不安になったり不安定になったりする子どももいます。

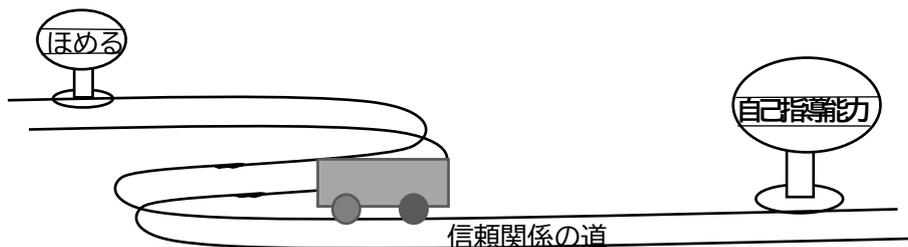
➤振り返ってみましょう

| | 【服装・立ち振舞いをチェックしてみましょう！】 | チェック |
|---|-----------------------------|------|
| 1 | 誰に対しても、自ら進んであいさつをしています | |
| 2 | 社会人としてふさわしい格好で出勤・退勤しています | |
| 3 | 授業にも、場面に応じた節度ある服装で臨んでいます | |
| 4 | 迅速な行動がとれる靴を着用しています | |
| | 【話し方についてチェックしてみましょう】 | チェック |
| 1 | できるだけ、明るい表情で子どもに話しかけています | |
| 2 | 説明が長くならないよう、端的に要点を絞って話しています | |
| 3 | 子どもの名前を呼び捨てにしないようにしています | |
| 4 | 相手が傷付くような言葉、差別的な言葉は使いません | |

Ⅱ－３ 信頼関係を築く「ほめる・認める・(叱る)」

(1) ほめ・認める → 信頼関係 → 自己指導能力

子どもへの指導・支援や信頼関係構築に向け、ほめる・認める（感謝するも含む）という姿勢を基本とします。子どもは自分が頑張ったことや望ましい行為を認められると、自分を高めたり、社会で適切に行動したりすることを学習することに繋がります。また、期待をかけ自信を与え、自己肯定感を育むことは、信頼関係の構築に作用します。



(2) 先生がほめる・認めることで教師と子どもの信頼関係を築く

① 何をほめ・認めるか

○子どもが自分を伸ばすことに繋がる行為

○周りのためになる行為

※教師の「良し悪しの基準」ではなく、子どもの「行為の基になっている思い」を汲み取る

※結果だけでなく、過程や行動を見取る



〇〇さんは、縄跳び100回に向けて毎日練習を続けているね。目標達成に向けて努力しているんだね。



〇〇さんは、図工（美術）の授業の後、水飲み場が絵の具で汚れていたのを拭いてくれていたね。ありがとう。

② 誰に、どこで伝えるか

○直接本人にそっと、みんなの前で堂々と

注：発達段階や事案により、人前でほめられるのを嫌う子どもや、ほめられる子どもを認めない子どももいることに配慮

○第三者（保護者、担任外の先生、友達、関係者）を介して

③ どんな方法で伝えるか

○対面の言葉（すごいね、頑張ったね、うれしいよ、ありがとう・・・）

○サイン・表情（アイコンタクト・ジェスチャー・笑顔・声色・・・）

○可視化（賞状・花丸・スタンプ・ご褒美シール・・・）

コラム

「ほめるところがないんです。」と嘆く先生もいらっしゃいます。そんなときは、ほめる必然性をつくるのも手です。

たとえば、「先生と一緒に水飲み場の汚れを落としてくれる？」と用事を頼みます。子どもが頼まれたことをしたら、その子をしっかり見て「ありがとう」と言います。

このことで、行動と「ありがとう」が必然性をもち、先生と子どもとのコミュニケーションづくりにもなり、お互いの信頼関係をつくるきっかけになります。

このような小さな成長でも（成功・失敗に関係なく）望ましい行動、挑戦している姿、頑張っている姿をほめ・認めましょう。

特に、叱られたり、うまくできないことが多い子どもがいたら、「あなたもきっとできるようになるよ」「今のあなたも十分頑張っているじゃない」などと優しく励ましたり、他の子には当たり前のことでも「よくできたね」と些細な成長もほめたりすることで、「先生は、私のことをいつも見守ってくれている」という安心感をもたせることが大切です。「できる」と判断することが教師の尺度になっていないか留意し、その子にとっての「できる」を見届ける眼を持ちましょう。

- (3) 保護者がほめる・認めることで**教師と子どもの信頼関係**を築く
学校からの連絡帳や通信、電話などでよい知らせを伝えることで、保護者が子どもをほめたり認めたりする機会が増えます。間接的に教師と子どもとの信頼関係を築くことになります。

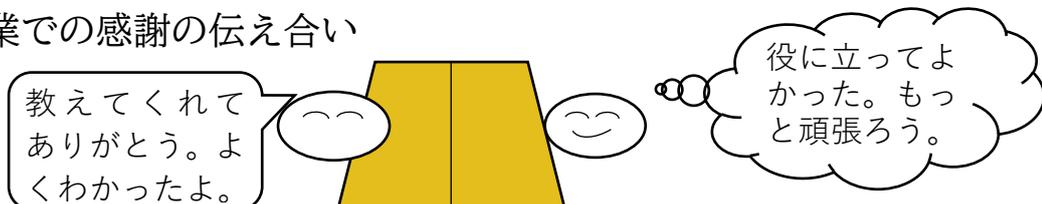


- (4) 子どもが互いにほめる・認め合うことで**子ども同士の信頼関係**を築く
学級活動や授業中に、子どもが互いにほめたり認めたりする活動を仕組みます。

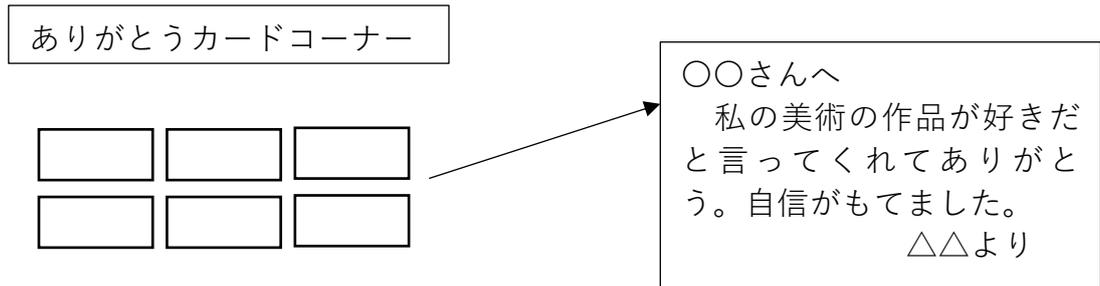
①学級、ホームルームでの紹介タイム



②授業での感謝の伝え合い



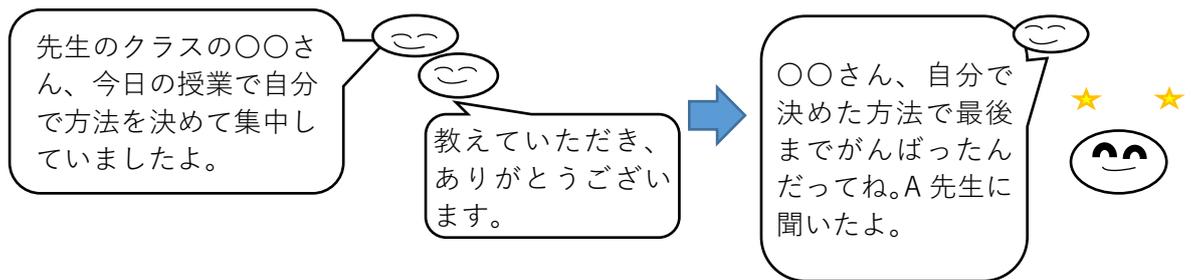
③掲示物での紹介（ありがとうカード・いいねカード）



(5) 全職員でほめる・認めることで

教師同士、教師と子どもとの信頼関係を築く

学年会や職員会議、休み時間などで情報の共有を行い、担任以外の様々な先生が子どもをほめたり認めたりできる環境を整えます。教科担任制等により様々な教師が違う見方で子どもを捉えていることを知り、多面的に見る機会になります。子どもにとっては担任以外にも話しやすい先生が増えることにもつながります。



(6) よくない行動は、合意形成を図りきちんと叱り、一緒に考える

子どもは発達途上の成長段階にいますので、不十分、不適切な行動をすることがあるのは当然です。教師の役目は、子どもに不適切であることに気付かせ、次からはどうするのかを自己決定させること、そして望ましい行動が取れたら、必ず認めてほめることです。これらのことが子どもの自己指導能力の育成に大きく影響するのです。

①子どもの話に耳を傾ける

子どもが不十分、不適切な行動をした時、教師のフィルターのみで決めつけ、注意したり叱ったりすることはできるだけ避けます。

まず教師は「そのとき、その子どもに何があったのだろう」と冷静に捉え、話を聞きます。子どもに話を聞くときには、「起きた事実」と「その時の感情」を区別しながら聞き取ると、振り返りにつながりやすくなります。また状況によっては、紙やホワイトボードなどに書いて子どもと一緒に見て確認しながら聞き取ると効果的です。

ただし、命や人権にかかわる重大な状況の時や緊急性が高いときは、毅然とした態度で確実にその行動を止めさせてから、子どもの気持ち収まるのを待って聞き始めることが必要です。

②内省を促す

子どもの思いを受け止めながらも、行動修正を促すには、なぜその行動が不適切なのか、その行動をどう思うのか考えさせたり引き出したりして内省を促します。「信頼しているあなたがそんなことをするのはとても残念です。」と行動だけを叱り、子どもへの肯定を含んだメッセージで伝えることが有効です。

③これからを一緒に考える

不適切な行動をした時、「代わりにどうしたらよかったのか」「次に同じことをしないためにはどうしたらよいか」を一緒に考えます。その子どもにとっては成長のチャンスでもあります。子ども自身がどうしたいかを丁寧に聞き、そのためにはどうすればよいか、必要に応じて助言・提案しながら、子ども自身の選択・決定を促します。子どもの合意なしに「○○しなさい。」と強制したり、安易に謝らせて解決を急ぐのは避けます。

大切なのは、その後、子ども自身が自己指導能力を高め、望ましい行動を取れるようになることなのです。

コラム

【ピグマリオン効果】

アメリカの教育心理学者ローゼンタールによって提唱された教育心理学における心理的行動の一つです。

人は、他者から期待されると、期待に沿った成果を出す傾向にあるという現象のことを言います。「教師期待効果」とも呼ばれます。

【PBIS (Positive Behavioral Interventions and Supports)】

学校環境におけるポジティブな行動介入と行動支援と訳されます。この考えの中には、望ましい行動を具体的に確認し、行動をできたら価値付けたりほめたりして行動を強化することが含まれています。新潟市の学校でも、理論を具体化して実践し、効果を上げているとの報告があります。